

『The Gist of Japan』（3）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 *Takayuki Onoue*

前回に引き続き、『The Gist of Japan』のなかの天理教に関する記述を見ていく。著者ピーリーは、天理教の信仰実践には日本のほかの宗教とは大きく異なるところがあると指摘。仏教徒が参拝や説教を聞くために寺に集まるのは年に3、4回程度で、神道の場合はほとんどそのような機会はない。しかし、天理教の信者は礼拝したり、教えを聞いたりするためにしばしば集まっていると述べている。また、天理教の排他性を挙げ、日本の宗教は互いに寛容であり、複数の教えを信仰している人もいるが、天理教信者は天理教だけに忠誠を誓わなければならないと記している。

ついで、キリスト教との関連について述べている。キリスト教の宣教師や信仰者が天理教について述べる際、キリスト教との関係についての言及がしばしば見られるが、ピーリーは、

天理教におけるキリスト教の影響を考えてみると興味深い。過去二、三百年のカトリックの伝統がなんらかを通じてミキに伝わっていない限り、彼女がキリスト教の影響を受けていたように思われる。しかし、のちの教師たちによる教団の拡張や発展はキリスト教から大きな影響を受けている。現在、説教を行う際にキリスト教の教えから借用している布教師もいる。一般の人々は、概して天理教をキリスト教と関連したものとしてみている。

と解説している。

このキリスト教との関連性について述べた後、天理教に関する記述は終了している。さらに、ピーリーはその他の宗教団体として蓮門教と黒住教の名前を挙げている。しかし、詳しく記すほどの重要性を持っていないとして、特にそれ以上の言及はしていない。そして、当時の日本における宗教事情に関するまとめとして、「日本の三大宗教である神道、仏教、儒教は、日本社会に縦糸と横糸として完全に織り込まれている。キリスト教が西洋の政治、社会、家族生活を形作ってきたように、これらの古代からの信仰は、日本においてその役割を果たしている。人々の法、道徳、作法と習慣のすべては、これらの宗教によって決められてきた。」と述べ、日本人にとって神道、仏教、儒教は幸福な生活を導く原則であり、基盤となっていると説明する。ここに天理教は含まれていない。しかし、これらの三大宗教には迷信的な要素があり、知的傾向を強めている社会状況へ十分に対応できず、徐々に衰退していくと考えられ、最終的にはキリスト教がその立場にとってかわるだろうと記している。

『The Gist of Japan』は、当時出版された日本に関する多数の著作のなかの一つであり、欧米社会で発行されていた新聞や雑誌などにこの書籍を紹介する記事が散見される。たとえば、ロンドンで発行されていた『Pearson's Weekly』1898年2月12日号の推薦図書のページでは、著者ピーリーによれば同書の内容は日本におけるキリスト教の宣教活動についてであるが、その前半部分では日本人々、歴史、社会、習慣、道徳などが詳しく述べられていると紹介。そして、日本ではすでに神道、仏教、儒教、そして天理教の4つの宗教が確立していると同書に記されているが、そのような文明化された人々に対する新しい宗教、つまりキリスト教の宣教は、未開の地の人々へ教えを伝えていくこととは大きく異なるだろうと述べている。さらに、日本人は宗教に対して非常に寛容であり、とくに神道、仏教、儒教に関しては、それ

らの教えをすべて受け入れ、信じることに何の矛盾も感じておらず、また各宗教間には敵対関係も生じていないようであり、そのような状況下では、新たな教えであるキリスト教に排他性があれば、容易には受け入れてもらえないだろうと述べている。

また、オーストラリアのメルボルンで発行されていた『The Australasian』の1897年11月20日号の文学欄でもこの『The Gist of Japan』が取り上げられている。アメリカ人宣教師が記した書物であり、その内容として日本の宗教について「何世紀にもわたって仏教が神道を凌駕し、強い影響力を有している。儒教もまた何百万人もの信徒を有している。新しい宗教である天理教はこの100年で大きく発展している。しかし、これらの宗教は互いに排他的ではない。すべての教えを深く信じている人もいれば、それぞれを少しだけ信仰している人もいるようである。」と紹介している。さらに、アメリカのニュージャージー州で発行されていた週刊誌の『Bridgeton Pioneer』1903年9月24日に、日本におけるキリスト教関係の書籍を紹介する中で、有益かつ興味深いものの一つとしてこの『The Gist of Japan』がリストアップされている。このように、『The Gist of Japan』は、当時欧米で発行されていた新聞や雑誌などで、日本に関する参考図書の一つとして紹介されていたのである。

ピーリーはこの『The Gist of Japan』の冒頭で、執筆にあたり参考した文献として、『Transactions of the Asiatic Society of Japan』と『Japan Mail』を挙げている。これらにD.C.グリーンの論文「Tenrikyo, or the Teaching of the Heavenly Reason」やその他の天理教に関する記事が掲載されていたことは以前に本連載で見てきた。『The Gist of Japan』とD.C.グリーン論文とは内容的に非常に似ている部分が認められる。ピーリーはおそらくグリーンの論文を読んでいたと推察でき、ピーリーの天理教に関する記述の多くはグリーンの論文を大いに参考にしていると言ってもよいだろう。ただし、グリーンが執筆したのは学術論文であり、それは天理教に焦点を当て、自身で収集した資料、教会本部や地方教会への訪問、そしてインタビューなどに基づいて書かれている。一方、ピーリーはキリスト教の宣教について述べることを第一の目的として執筆したのであり、天理教は日本の宗教事情を紹介するなかで特筆すべき一宗教として取り上げている。またピーリーの著作は、日本の国土、人々、社会、文化を広く紹介する一般書としての性質も持っている。こうした点にピーリーの著作の特徴がみられる。

上記で見たように、『The Gist of Japan』は当時欧米で発行されていた新聞や雑誌などで紹介されたため、宣教やビジネスなどで日本と強くかかわりをもっていた外国人だけでなく、他の一般の人々にもより広く読まれていた可能性がある。さまざまな国や地域の出版物に掲載された図書紹介からは、日本という未知の国、人々、社会、文化全般に寄せられた当時の欧米人たちの関心の一端がうかがわれる。宗教に関しては、日本におけるキリスト教の宣教活動の状況や今後の見通しについて言及しているものが多く、読者がどの程度天理教へ興味を抱いたかは定かではない。しかし、天理教の海外伝道が開始された20世紀末という時期に、すでに外国人によって「天理教」という言葉が文書を通じて広く紹介されていたことは大変興味深いことである。